

二〇一二年度・学力考查問題【国語】

(中学第三回)

注 意

- 一、試験時間は50分です。
- 二、答えはすべて解答用紙にはつきりと記入しなさい。
- 三、解答用紙のみ試験終了後集めます。
- 四、問題は9ページで**一・二・三**の三題あります。開始の合図で必ず確認し、そろつていないう場合にはすぐに手をあげなさい。
- 五、本文の表現については、作品を尊重し、そのままにしてありますが、設問の都合上、省略した部分、表記を改めた部分があります。
また、特に指示のないかぎり、句読点も一字に數えます。

—— 線あくおのひらがなを漢字に直しなさい。

- 1 休日にえいが館に行く。
あ
- 2 きりつある生活を送る。
おと
- 3 でんじはが発生する。
あ
- 4 神が天地をそぞうする。
うみ
- 5 えんげき部に入る。
ぶ

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

どういうわけなのか、あの薄暗い踊り場に、しおり先生はときどき顔を見せるようになつた。毎日ではなかつたけれど、鞄にお弁当箱と水筒を詰めて、先生はにこにこしながら、机にお昼ご飯を広げていくのだ。

もしかすると、ぼっちでご飯を食べているわたしのような人間を、憐れんで心配してくれているのかもしれない。けれど、いじめられているだなんてことが先生に知られてしまつたら、お母さんに伝わつてしまふから、それだけは避けなくてはいけない。

「べつに、好きでここで食べてゐるんで、放つておいても大丈夫ですよ」

「冷たくそう告げたけれど、しおり先生はあつけらかんと言つた。
「言つたでしよう。司書室が図書委員の子たちで騒々しいときは、先生もいろんな場所を放浪して一人でご飯を食べてるの。この場所はお

気に入りの一つで、言うなればわたしの方が先輩なわけ」

ここで初めて先生と遭遇したとき、先生もまた遅めのお昼ご飯を食べに来たところだったらしい。つまるところ、わたしは先生の居場所を奪つてしまつたことになるのだろう。

「騒がしいのは苦手だけれど、でも、ずっとひとりなのは寂しいから。

二人くらいが丁度いいよね」

わたしは視線を落とし、そうかもしれませんね、と呟く。それから、お弁当箱の卵焼きを口の中に放り込んだ。お母さんは、もしかして味付けをなにか変えたのかもしれない。それはとても冷たかつたけれど、しょっぱいだけじゃなく、久しぶりに甘い味がした。

お昼ご飯を食べながら、しおり先生とする話題といえば、司書の先生なのだから当然というべきか、やつぱり本の話だった。

「あの本はどう？ もう読み終えた？」

「まだです。読むのは、遅い方なので」

わたしは俯いて、お箸を運びながら答える。それから、なぜか今になつて読書に興味を持つていないと思われるのが怖くなり、慌てて付け足した。

「その、あまり早く読むと、もつたいない気がする、ので」

「そつかそつか。先生もわかる。そうだよね。気に入った本は読み終えるのが寂しくなつちゃうものね。いい本はじっくりと味わうべきだよ」

気に入つただなんて、まだ言つていない、のだけれど。

「先生は、どんな物語が好きなの」
「そんなに嬉しそうに同意を示すこの先生が、普段はどんな本を読ん

でいるのだろうと、わたしは少しだけ気になってしまった。

「え、うーん、先生が好きな物語かあ……」

先生はしばらく、視線を暗い天井に向けて、考え込んでいた。

「やっぱり、小説なら、ミステリかなあ」

「ミステリ？ 殺人事件のこと？」意外に思つて顔をしかめた。「先生、あんな血なまぐさいのが好きなの？」ちょっと意外

先生は心外そうに眉を寄せて、頬を膨らませる。

「血なまぐさいだなんて、そんなことないよ。確かに殺人事件は、先生も少し苦手だけれど」

「殺人事件じゃないミステリなんてあるの？」

すると先生は、にやりと笑つてわたしを見つめた。

「もちろん、いっぱいあるよ」

薄暗いこの場所に窓から差し込んでくる僅かな陽の光が、先生の頬を照らす。きらりと、その瞳が輝いたような気がした。

「世の中にはね、人が死んだりしないミステリも、たくさんあるの。先生はそれが好き」

いまいち想像ができなくて、わたしは彼女に訊ねる。

「そんなの、なにが面白いわけ？」

「面白いよう。先生の好きな物語に出てくる人たちのはね、日常に起きるどんな些細なことにも眼を光させて、不思議なことを見つけては、

あれはどうしてだろう、なんでなんだろうって、たくさん考え方よさうとする。だからこそ、身近な誰かが困つていたり、苦しんでいるとき

に、いち早く気づくことができるようになるのね。でも、これって物語の中に限ったことじやなくて、わたしたちの世界においても大切な

視点だと思わない？ 先生が好きな物語は、その尊さを教えてくれるの」

なんだろう。わかつたような、わからないような、それはとてもへンテコな説明だった。

「物語から持ち帰れることって、たくさんあるんだよ。三崎さんも、いつかそういうものを見つけられるといいね」

物語からなにかを持ち帰る。わたしにはその言葉の意味がよくわからなかつた。どうなのだろう。物語から、なにかを見つけて持ち帰ることができたとして、それがなんになるのだろう。それが、今のわたしを救つてくれるのだろうか。たとえば、星野さんたちを懲らしめたり、急激に落ち込んだわたしの成績を戻してくれたり、高校や大学に行けるような未来を取り戻してくれたりするのだろうか。

わたしの人生を、たかが本の中にある物語が、どうにかしてくれるはずなんて、あるわけがないのに。

「そうだ。三崎さん、よかつたら、これをもらつてくれる？」

言いながら、先生はどこからともなく、金色の奇妙なアクセサリーを取り出した。

「そう。アクセサリーだと思った。それは金に輝く細長い棒状のもので、先端は眼鏡のつるのよう丸みを帯びており、そこから花のかたちのチャームが垂れていた。一見すると、簪のようにも見えるけれど、棒の部分が平べつたい。

「きれい」わたしはそれを受け取り、花のチャームが抱いた青い宝石のような煌めきに眼を落とす。「きれいだけれど……。これ、なんでですか？」

「栗だよ。ブックマーカー。これを作るのがね、先生のささやかな趣味なの」

「え、これが、先生が作ったの？」

「そうだよ」

驚いて顔を上げると、先生は子どもみたいな表情で得意そうにしている。だからしおり先生って呼ばれているのかもしれない。わたしは、先生のその表情がなんだかおかしくて、ちょっと笑ってしまう。先生も、笑いながら言つた。

「栗はね、目印なの。昔の人は、山で迷わないように、木の枝を折つて目印にしていたのね。それで、枝を折るって書いて枝折つて呼んでいて、本の栗の語源はそこから来ているんですって」

「ふうん」

わたしは、その小さな金の枝を掲げて、窓から差し込んでくる弱い光に照らす。

「三崎さんが道に迷わないように——。ううん、迷ったときでもいいの。それを手にして、読書をしてくれると、先生は嬉しいな」

揺れ動く一輪の花のチャームが、光を受けてきらりと輝くのを見ながら、わたしは先生のその言葉を、ぼんやりと耳に入れていた。

「自分が事故物件だつていう自覚がないんじゃないの？」
そうやつて教室で喧われ、無視されて、心が挫けそうになつたとしても、あの暗い階段の踊り場や図書室の隅で静かに物語を読み返すことをすれば、たとえほんのひとときだけであつたとしても、気を紛らわすことができた。

物語に出てくる登場人物たちは、みんなどこかわたしに似ている子たちだった。星野さんたちみたいな、明るくて眩しい女の子たちは主役として登場することがない。わたしが見たり読んだりしたことのあるドラマ、アニメ、漫画、映画に出てくる女の子たちは、わたしを嘲笑する星野さんたちのように、みんなにかを持つている子たちばかり。それは人から好かれたり、なにかに夢中になれる才能だ。それを持たないわたしには、青春を送る資格がないのだと思つていた。わたしは物語の中に、ずっとわたしを見つけられずにいたのだと思う。けれど、ここに書かれている子たちは違つ。

なにも持つていなくて、だからこそ悩んで、苦しんでいた。
わたしには、その悩みと苦しみが、手に取るようになる。

わたしみたいな人間がいてもいいんだつて、赦されるような気がする。

早く読んでしまうのが、もつたいないという気持ちが強かつたから。先生がくれた栗を片手に、何日もの時間をかけて、わたしはじつくりとあの本を読み進めていった。その地味な物語を読むことは、わたしにとつての小さな慰めだったと思う。

「あーあ、人生詰んでるんだから、もう学校に来なくていいのにね」

物語の中には、わたしと同じように、教室から無視される子や酷い言葉を投げかけられる子がいた。それでも、彼女たちは物語の中で必死に生きている。彼女たちなりに、灰色の青春を精一杯に過ごしているのだ。眠る前、わたしはその地味な装幘^{※4 そうぢ}を抱きしめて、自分に言い聞かせた。人生、詰んだりなんてしていない。この物語の中のようになに頑張つて生きている子たちだつている。きっとわたしは一人じゃない。

悔しさに唇を噛みしめながら、祈るみたく、小説の中に出でた言葉を心の中で甦らせていく。

それでも枕は濡れてしまうけれど、自分と同じ気持ちを抱いている子が、この広い世界のどこかにいるのかもしれないって考えれば、どうにかわたしは生きていくことができる。星野さんたちが集団でわたしを押し潰そうとしているのなら、わたしは姿の見えない誰かと手を繋いで耐え忍びたいと思つた。この世界のどこかには、わたしのような目に遭つてゐる人間がきつといははずだから。⁵

(相沢沙呼)

『教室に並んだ背表紙』集英社所収

※1 ぱつち：ひとりぱつち。

※2 詰んでいる：おわつていて。

※3 事故物件：かつて事件や事故が起きたために、買い手がつきにくい不動産物件。ここでは、周囲から避けられ孤立してい

る人を指す。

※4 表帳：本の表紙やカバーなどのこと。

問一 線a 「あつけらかんと」・b 「些細な」とあります

が、本文における意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a あつけらかんと

ア 平然として

イ 安心して

ウ 落胆して

エ 憤然として

b 些細なこと

ア 複雑なこと

イ みすぼらしいこと

ウ 取るに足りないこと

エ 極めてきめ細かいこと

問一

——線1 「しょっぱい／＼甘い味がした」とあります。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 忙しい中あわててお弁当を作り、味付けを間違えたお母さんのそそかしさにあきれた。

イ 一人で食べなくてもよい安心感や嬉しさから、卵焼きにいつもとは違うおいしさを感じた。

ウ わたしが少しでもおいしく食べられるように、お母さんが工夫を続けていることに感謝した。

エ いつも一人で食べるお弁当を先生と食べる中で、お母さんが卵焼きの味付けを変えたことがわかつた。

問三——線2「薄暗い——陽の光」とあります、この表現についての説明として最も適当なものを次のなかから選び、記号で答えなさい。

ア 昼食場所は暗いが、ここ以外は明るい学校生活が広がっていることを表現している。

イ しおり先生に対する嫌悪感^{けんお}が、少しずつ信頼に変化していったことを表現している。

ウ しおり先生からすすめられた本を読むことによって、自信を持ちはじめたことを表現している。

エ ひとりぼっちの息苦しさの中に、しおり先生によって希望がもたらされていく様子を表現している。

問六——線5「わたしは姿の——耐え忍びたいと思つた」とあります、この時の「わたし」の説明として最も適当なものを次のなかから選び、記号で答えなさい。

ア 今まで青春を送る資格がないと思って生きてきた自分たちが、今後はこの社会をより良い社会にしていく、という決意を新たにした。

イ 今まで他人から好意を持たれたり、一人の人間を好きになつたりということのなかつた自分が、読書を通して友情を強く意識するようになった。

ウ 今まで才能がある人の陰に隠れて生きてきた一人ひとりが、これから自分の幸せを求めてそれぞれに立ち上がるときが来たのだ、と確信している。

エ 今まで一人でいることに悩んでいた自分が、登場人物の頑張りに共感し、同じような思いをしている人との連帯を想像することに救いを求めている。

問四——線3「葉^は」とありますが、「しおり先生」はどのような思いを込めて「葉」を渡していますか。ていねいに説明しなさい。

エ 「その地味な——」と思う」とありますが、「わたしにとっての小さな慰め」とはどうのようなことですか。「——」に続く形で文中から三十一字で探し、最初の五字を抜き出しなさい。

(三十一字) といふこと。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

生き物にとって、「競争に勝つ」とは、どういうことだろうか。
¹ 生物たちは厳しい生存競争を繰り広げている。

競争に勝った者が生き残り、競争に敗れ去った者は、滅びてゆく。^{ほろ}

競争に勝つためには強くなければならない。もしかすると、あなたは、そう思うかもしれない。

本当にそうだろうか。

自然界では、競争に敗れ去った者は滅びてゆく。そうであるとすれば、今、自然界に生き残っている生物は、すべて競争を勝ち抜いた勝者ということになる。

A 「A」、私たちのまわりを見回してみると、どう見ても、強そうに見えない生き物がいる。

子どもたちにつつかれて丸くなっているダンゴムシや、なぜか道路を渡つて車に轢かれているケムシがいる。みんな弱そうな生き物たちも、みんな厳しい生存競争を勝ち抜いた勝者だというのだろうか。生物は生存競争に勝ち残らなければ、この世に存在することはできない。

その生き物が、この世に存在しているということは、それがどんなにつまらなそうに見える生き物であつたとしても、どんなに弱そうな生き物であつたとしても、生存競争を生き抜いた勝者であるということなのだ。

強い者が勝つのではない。生き残った者が勝者なのだ。
体が大きい方が強い。力が強い方が強い。確かにそうである。しかし、この世の中にあまたの生き物たちが存在していることを見れば、けんかの強さや競争の強さだけが「強さ」ではないということに気がつくだろう。

^{※2} ガラパゴスの強みとは、いったい何なのだろう。島の生物について話をする前に、生物の生存戦略にとつて重要なキーワードを紹介することにしよう。

それが「ニッチ」である。

「ニッチ」という言葉は、ビジネス用語としてもよく用いられているが、もともとは生物学の用語として用いられていたものが、ビジネスの場面でも使われるようになつた。

ビジネスの場面でニッチといふと、ニッチマーケティングやニッチトップというように、大きなマーケットと大きなマーケットの間にあら「すき間」というイメージが強いかもしれないが、生物の世界でいうニッチは「すき間」の意味ではない。

² 生物学では、ニッチは「生態的地位」と訳されている。

生態的地位という言葉が意味するように、ニッチとは、その生物が自然界で持つポジションのことである。つまり、その生物の居場所である。

そのため、すべての生物はニッチを持っていて、ニッチを持つことのできない生物は、自然界で存在することができない。

そして、ニッチは重なり合うことはなく、すべての生物種がその生

物种だけのニッチを持つことになる。

生物学で用いられる「ニッチ」という言葉は、さらに元をたどると、装飾品を飾るために教会や寺院などの壁面に設けられた「くぼみ」を意味している。やがてそれが転じて、生物学の分野で「ある生物種が生息する範囲の環境」を指す言葉として使われるようになったのである。

一つのくぼみに、一つの装飾品しか飾ることができないように、一つのニッチには一つの生物種しかすむことができない。このことから、この生物が自然界で占めるポジションをニッチと呼ぶようになったのだ。

その生物種のニッチは、その生物種だけのものである。そのため、ニッチが重なったところでは、激しい競争が起こり、勝者だけがニッチを手にことができる。そして、ニッチを奪われた者は、この地球上から滅びるしかないのだ。

まるで **X** のようだ。この **X** に勝ち残った生物が、そのニッチを占めることができるのである。

生物の世界では、ニッチは「生活空間」と「エサ資源」という二つの要因が影響する。この「生活空間」と「エサ資源」という観点においてオリジナリティあるオンラインのポジションを獲得しなければならないのだ。

ニッチには、大きなニッチも、小さなニッチもある。しかし、実際には、さまざまな生物がニッチをめぐって争い合い、ニッチは埋め尽くされている。その中で、大きなニッチを占めることは簡単ではない。そのため、どうしても一つ一つの生物のニッチは小さくなり、生物た

ちはすき間を埋めるように分け合っている。

B、ビジネスの場面ではニッチは、「すき間」という意味に用いられるようになつたのである。

生物のニッチを決めるものは、主に「生活空間」と「エサ資源」である。

C、贅沢をいわずに、場所を選ばずにどこにでもすめばいいし、エサにこだわらずに何でも食べればいいと思うかもしない。

しかし、実際にはそうはならない。

ライバルになる生物が現れるのだ。

どこでも住めるということは、あらゆるところで他の生物とニッチの奪い合いになる。何でも食べられるということは、どのエサ資源に関しても、他の生物と争いになる。

ニッチを広げることは、じつは簡単ではないのだ。

そのため、生物のニッチには基本ニッチと実現ニッチというものが存在する。³

基本ニッチは、その生物が本来持っているニッチである。**D**、生息できる範囲の環境や、エサにすることができるすべてのエサ資源が基本ニッチを決める。

しかし、ニッチを奪い合うライバルがいれば、ニッチを独占することはできない。すると、ライバルとの争いの中でライバルよりも有利な条件であればニッチを獲得できるが、ライバルよりも不利な条件ではニッチを奪われることになる。こうして、ライバルとなるさまざまな生物と競い合つた末に勝ち取つたニッチが「実現ニッチ」である。

世の中にはジェネラリストという言葉と、スペシャリストという言葉がある。

ビジネスの場面ではジェネラリストは、さまざまな業務をこなした^{がまざむ}、さまざまな分野に精通した人を言う。一方、スペシャリストは特定の分野に関する深い知識や経験を持つ人を言う。

生物の世界でも、さまざまな環境に適応し、さまざまなものを工サ^{まちが}にできるジェネラリストと呼ばれる生き物と、特定の環境や特定の工サを専門にするスペシャリストと呼ばれる生き物がいる。それでは、⁴ジェネラリストの生き物とスペシャリストの生き物とは、どちらが有利なのだろうか。

生物の世界では、間違^{まちが}いなくスペシャリストが有利である。

何しろ、生物の世界は、ニッチの奪い合いである。常に激しい競争が繰り広げられ、競争に有利なものは生き残り、競争に不利なものは滅んでいく。

そんな戦いに勝利するためには、「何でもできます」というジェネラリストではとても勝ち残ることができない。「ここだけは負けない」^{まちが}というスペシャリストであることが必要なのである。

こうして、すべての生物は、「ここだけは負けない」というニッチ^{を獲得}している。そして、そんな生物たちによつて、自然界のニッチは埋め尽くされているのだ。

ただし、それではジェネラリストは必要ないのかというと、そう言^{い切れない}のが、自然界の難しいところだ。

たとえば、あまりにスペシャリストとして特化すると、環境が変化したときに対応できなくなる。あるいは新天地に分布を広げていく上でもジェネラリストの特性が求められる。

自然界はスペシャリストでなければ生きてはいけない。しかし、生き残つていく上ではジェネラリストの特性も求められる。

自然界の生き物たちは、こうしてスペシャリストとジェネラリストのバランスを保ちながら生存戦略を組み立てているのである。
(稻垣栄洋『生物に学ぶ ガラパゴス・イノベーション』東京書籍より)

※1 あまた：たくさん。

※2 ガラパゴス：長年外来の生物が侵入せず、生物が独自の進化を遂げた「ガラパゴス諸島」を指す。現在ではビジネス用語として用いられることがある。

問一 A ↗ D にあてはまる言葉として適當なものを次のなかからそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じ記号を二度使ってはいけません。)

ア あるいは イ それならば

ウ そのため エ しかし
オ つまり

あります。――線1「生物たちは厳しい生存競争を繰り広げている」とあります。最も適當なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 生物は体が大きくて力の強いものが勝つ。

イ 生物は力ではなく生き残ることで勝者となる。

ウ 生物は生き残りをかけて進化しようと戦っている。

エ 生物は力が強く体が大きい方が生きるのに不利である。

問三　——線2「生物学では——訳されている」について。

(1) 「生態的地位」とありますが、その説明として最も適当なものを次のなかから選び、記号で答えなさい。

ア 自然界で存在するために必要な、他の生物と重なり合つて

生息できる範囲の環境。

イ 装飾品を飾るためにある、教会や寺院などの壁面に設けられた「くぼみ」。

ウ 一部の限られた生物だけが手に入れられる、生存するのに大切な場所。

エ 生物が自然界で存在するために必要で、他の生物と重なり合うことのない生息の場。

問四　□Xに入る言葉として最も適当なものを次のなかから選び、記号で答えなさい。

- (2) 「ニッチ」はどのような要因から決められますか。文中から二つさがし、それぞれ抜き出しなさい。

ア ばば抜き

イ イス取りゲーム

ウ 鬼ごっこ

エ オセロ

問五　——線3「生物のニッチ——存在する」とありますが、「基

本ニッチ」と「実現ニッチ」をそれぞれ解答欄に合う形で説明しなさい。

問六　——線4「ジエネラリストの——有利なのだろうか」とありますか。筆者の主張として最も適当なものを次のなかから選び、記号で答えなさい。

ア ニッチの奪い合いである生物の世界で生き残るためには、「何でもできます」というジエネラリストではなく、「ここだけは負けない」というスペシャリストであればあるほど有利である。

イ 常に激しい競争が繰り広げられる生物の世界においては、「ここだけは負けない」というスペシャリストであるのはもちろん、「何でもできます」というジエネラリストが求められるのは人間社会と同じである。

ウ 生物には「ここだけは負けない」というスペシャリストであることが必要だが、その性質が強くなりすぎると、変化についていけないこともあるので、「何でもできます」というジエネラリストの特性も必要である。

エ 自然界において、生物は「ここだけは負けない」という競争に特化したスペシャリストよりも、「何でもできます」というジエネラリストのほうが、より質の高い「ニッチ」を獲得できる。

(国語)

解答用紙(中学第三回)

受	験	番	号

氏名

得点

問
六

問
五

問
四

問
一

問
二

問
三

二

一

(あ)

え
い
が

(い)

き
り
つ

(う)

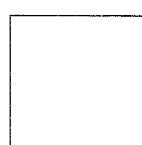
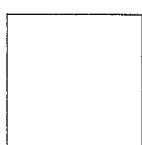
で
ん
じ
は

(え)

そ
う
ぞ
う

(お)

え
ん
げ
き



三

問

一

A

B

C

D

問

二

問

五

「基本ニッチ」は、

「実現ニッチ」は、

ニッチのことである。

ニッチのことである。

問

六